

日本英語教育史学会 会報

317

2023 年 10 月 20 日

HiSELT Society for Historical Studies of English Learning and Teaching in Japan

日本学術会議協力学術研究団体 日本英語教育史学会

発行人 日本英語教育史学会 (代表: 田邊祐司)

事務局 〒727-0023 広島県庄原市七塚町 5562
 県立広島大学 庄原キャンパス 河村和也研究室
 tel: 0824-74-1727 fax: 0824-74-0191
 e-mail: membership@hiset.jp

会費納入口座 (名義人: 日本英語教育史学会)
 ゆうちょ銀行【振替口座】00150-3-132873
 ゆうちょ銀行〇一九店【当座口座】0132873

学会公式ウェブサイト www.hiset.jp

第294回研究例会報告

2023 (令和 5) 年 9 月 16 日 (土), 第 294 回研究例会が Zoom を用いたオンラインの形態により開催されました。参加者は 18 名でした。

例会では 2 つの研究発表が行われました。最初の研究発表では、馬本勉氏 (県立広島大学) が「明治期英語教科書独習書の文法と訳読法: 林十次郎の独案内と直訳を例に」というタイトルでお話しされました。続いて久保野雅史氏 (神奈川大学)・広川由子氏 (千葉県立保健医療大学) による「高校入試英語スピーキングテスト導入をめぐる教育制度・行政上の諸問題」の研究発表が行われました。司会は拝田清氏 (和洋女子大学) でした。以下に参加者の感想を掲載しますのでご参照ください (①は馬本氏, ②は久保野氏及び広川氏の発表への感想です)。

<発表①の感想>

- ◆実際の記述内容に踏み込んだご発表で、一口で「独案内」といっても著者によって様々な工夫があることを再認識しました。それぞれの特徴を時系列的に並べ、傾向や変化の流れにおいて分析されれば、「独案内」の変遷史が見えてきそうですね。特に、各単語に番号を振る方式がいつ、なぜ消えたのかを知りたいと思いました。論文化を願っております。(みかん舟)
- ◆明治期の独習書について全く知りませんでした。先人のたゆみない努力による知恵や工夫が垣間見られて、良かったです。(匿名希望)
- ◆明治期の英語独習書を刊行した林十次郎なる人物や、末尾に「○」をつけるユニークな点など、大変興味深く拝聴しました。林がどんな人だったのかわかれば、是非教えていただきたいです。(広川由子)

<発表②の感想>

- ◆テストの内容や、制度的にも、運営面でも、瑕疵が多いにも拘わらず、このままでは何年も続いていきそうな入試の制度ですが、行政法的にも問題があるという指摘には、新しい学びがありました。(匿名希望)
- ◆いろいろと問題のある「スピーキングテスト」ですが、二部構成のご発表を拝聴し、改めて現状を分析し、記録として残し、広く知らせる必要性を感じました。発表の二日前の 9 月 14 日 (木) 朝日新聞 22 面に「スピーキングテスト 課題解消は—事業者候補 英国の団体に聞く」

と題して、ブリティッシュ・カウンシルのジェイミー・ダンリー氏のインタビューが掲載されていました。これを読みましても、なかなか課題解消は難しいことが分かります。また、歴史的視点からの分析の重要性も示唆されたご発表でした。ありがとうございました。(ニーナ)

◆都教委の作成したスピーキングテストの数々の問題点は、今後も研究者として追究していくべきと考えています。(広川由子)

＜会全体に対する感想＞

◆オンラインでもまったくストレスを感じさせない運営と、その準備に当たられている裏方の皆さんに敬意を表します。(みかん舟)

◆会員外でしたが、ズーム中に、気さくに声をかけていただき、有り難かったです。ありがとうございました。(匿名希望)

◆特にございません。ありがとうございました。(広川由子)

発表を終えて

馬本 勉 (県立広島大学)

明治期の舶来英語教科書に対し、学習者向け独習書が多数出版されたことが知られています。英語原文の有る横書きの「独案内」と、英語原文の無い縦書きの「直訳」とに大別される独習書は、訳読を手引きする数字や記号など共通の特徴とともに、著者毎に固有の工夫も見て取れます。

発表者はこれまで、ニューナショナル、ユニオン、ロングマンズといった、教科書別に独習書を見ようとしてきましたが、今回は複数の教科書に対して林十次郎(広島県士族)が著した独習書に焦点を当て、他の著者との比較を交えながら、林の独習書の特徴を見ていきました。

質疑応答の中で、形態による分類だけでなく、記述の工夫を引き継ぐ書物の系譜という視点で独習書の分析はできないか、という示唆を得ることができました。ちょうど「〇〇系」として分類・分析される辞書の系譜学のように。

今回取り上げた林の特徴が、他者の特徴を引き継いだものか否か。また、林の特徴を引き継ぐ独習書の有無はどうか。さらなる調査研究の課題を与えられた思いです。貴重なご意見の数々を頂戴し、まことにありがとうございました。

発表を終えて

久保野 雅史 (神奈川大学)

5月に続いて、「都立高校入試に導入されたスピーキング試験(ESAT-J)の問題点」について発表する機会を与えて下さり、ありがとうございました。全国大会では、①導入の経緯、②実施体制の脆弱性、③テストとしての質、に絞って指摘しました。今回報告したのは、④IRTを使用する目的、⑤本試験と追試験の等化方法、⑥受験者へのフィードバック情報の内容、⑦志望校選択への影響、⑧不受験者の扱い、です。

11月の本試験欠席者は12月の追試験を受験することになりますが、合格判定資料に使うためには、本試験と追試験の等化(equating)を経てスコアを算出する必要があります。等化には「異なる試験に同じ項目(問題)を出題する」「異なる試験を共通受験者がモニターとして受ける」という2通りの方法がありますが、試験問題を公開しているため、前者はあり得ません。また、後者の

場合は、本試験・追試験の当日に両者を受験できるモニター受験生を確保しなければなりません。等化方法に関する議員の質問に対して、都教委は「秘匿事項」の一点張りで回答を拒否しています。どのように等化したのか、そもそも等化したのか、という疑念を払拭できないまま、試験日が近づいています。

発表を終えて

広川 由子 (千葉県立保健医療大学)

本発表では、現在進行中の東京都中学校英語スピーキングテスト (ESAT-J) を法制度的見地から検討するため、東京都教育委員会の都議会での答弁に着目しました。というのもテストの欠陥がなくなったら ESAT-J は実施してよいのか、という問いが必要だと感じたからです。答えはノーです。都教委はテスト実施の根拠法を十分提示できないまま、ある議員からのつつこみに、このテストは都教委自身の「教育活動」だと言い張りました。都教委は、都教委が学校の先生になって、生徒に英語教育を施す、と言っていることになります。私はこの異常な答弁を多くの人に知らせ、一刻も早くこのテストを中止させなければと考えています。

当日は、今後研究を進めていく上で有益なご意見やご質問をいただきました。例えば「地方教育行政法第 21 条 19 号でもって、スピーキングテストは実施可能では？」とのご質問がありました。当日は舌足らずでしたので、ここで補足させていただければと思います。当日も言いましたが、この条文を持ち出さなくても調査依頼であれば、国の学テと同様に都教委の ESAT-J 実施は可能です。しかし ESAT-J が調査依頼ではないと言っているのは都教委自身だということにもっと注意を向けてほしいと思います。さらに都教委は入試事務でもないと言っています。そして都教委自身の「教育活動」だと言うのです。都教委は訳のわからない説明はやめて、誰もが納得できる根拠を示せばよいだけのことです。それがなぜできないのでしょうか。それは無理に無理を重ねているからなのではないでしょうか。そして既成事実を積み重ね、ESAT-J の定着をねらっているとも捉えられます。今後もし是非活発な議論をお願い致します。みなさま、当日はご清聴ありがとうございました。

>> この先の研究例会・全国大会

- ◆ 第 295 回研究例会 2023 年 11 月 18 日 (土) オンライン開催
- ◆ 第 296 回研究例会 2024 年 1 月 20 日 (土) オンライン開催
- ◆ 第 297 回研究例会 2024 年 3 月 16 日 (土) オンライン開催

→日程や場所は変更される場合があります。その際は会報およびウェブサイトでお知らせします。

研究例会での発表希望者は、(1) 発表希望月、(2) タイトル、(3) 発表概要 (100~200 字程度)、(4) 使用予定機器、の 4 点を明記の上、発表希望月の 3 ヶ月前の 10 日 (3 月発表希望であれば 12 月 10 日) までに日本英語教育史学会例会担当へお申し込みください。

Email: reikai@hiset.jp

日本英語教育史学会 第 295 回 研究例会

日 時： 2023 年 11 月 18 日 (土) 14:00~17:00
オンライン開催

研究発表

「台湾英語教科書に現れる構造言語学—日本との繋がりとその分かれ道」

平井清子 (北里大学)

【発表者から】台湾では、1950 年代後半から 1960 年代初めに米国ミシガン大学で英語教授法を学んだ帰台教育者たちが Oral Approach を英語教員育成に導入し、同時期に構造言語学の理論に基づく中高の教科書が出版され、構造言語学派の理論により英語教育の指導法が確立されていく。このように台湾英語教育界では、日本とほぼ時を同じくして構造言語学が英語学習の主流となっていくことが明らかとなった。

しかし現在の台湾と日本の英語教科書では、指導法からくる「文学教材」の扱い方の違いが認められる。本発表では台湾が日本と構造言語学を巡り繋がりながらも分かれ道を辿るまでを、両国の教科書を比較検討しながら実証的に明らかにすることを試みる。

研究発表

「中学校英語教科書に見られるジェンダーの表され方—

1968 年~2021 年に発行された教科書の登場人物に焦点を当てて—」

吉村和也 (和洋女子大学大学院 [院生])

【発表者から】本研究の目的は 1968 年~2021 年に発行された中学校英語検定教科書におけるジェンダーの扱われ方の変遷を明らかにすることである。教科書には「隠れたカリキュラム」として生徒にステレオタイプを植え付けてしまう可能性が潜んでいる。その危険性を指摘し教科書を分析した研究も存在するが、特定の年代の教科書に限られたもので、古い時代の教科書や現行の教科書は対象となっていない。そこで本研究では、予備的調査の位置づけで、1968 年~2021 年に発行された教科書を分析対象とし、特に挿絵・写真に登場している男女の比率や登場人物の性差に起因する扱われ方を検証していく。

参加費： 無料

問合せ： 日本英語教育史学会例会担当 (reikai@hiset.jp)

EDITOR'S BOX 今年の猛暑は記録的で、私が秋田に来てから初めて 38℃台を経験しましたが、同時に大雨の被害も深刻でした。7月の大雨については前号のこの欄で触れましたが、9月中旬にも記録的な大雨が降り、避難警報も発令されました。／わずか2ヵ月ちょっとの間に2度も大雨を経験したことで、今後がとても不安になりました。コロナの件が一段落(あまり報道されなくなっただけで実際は終わってはいないのですが・・・)しても、安心・安全な生活が戻らない現実に衝撃を受けています。(若)

© 日本英語教育史学会会報編集部 (秋田大学 若有研究室 wakaari@nifty.com)